

蓬萊町だより

第九号
平成十三年三月三十日
蓬萊町会
蓬萊文化
発行
編集者

漱石の旧居を背景に躍った (その二)

巷と青春の光と翳

上野 静

父、斉藤文根氏は戦中、海軍の主計将校で現在は財閥解体後の三井会の顧問を務めている。母は日本女子大専攻科の卒業生だった。一人娘の彼女も母と同じ日本女子大専攻科政治生活科の出身である。

シンブルで気立ての優しい品位のある人柄だった。色白で纏致もよく瓜実顔の美人型である。一見して良家のお嬢さんというタイプだった。

小沢氏も大いに喜び、乗り気だった。

見合いは斉藤家で行うことになっていた。

小沢氏は約束の時間通り、日産サニーを運転し、私の家の前でクルマを止めた。

私の女房と二口三口挨拶を交わすと、私は彼のクルマに同乗し、斉藤家に向かった。

斉藤家ではファミリー三人が出迎えた。

父文根氏は早速、案内し招じ入れてくれたのは「我猫庵」という六畳間の部屋だった。

一間ほどの欄間に漱石直筆の「我猫庵」という横書の文字が入った額が古色蒼然として架っていた。文根氏は漱石愛用の書齋だったが手を加え、応接室に使用していた。お互いにフイリングが合ったらしく、話が弾んで

いた。

やがて、お嬢さんは小沢氏を母屋に誘い「我猫庵」の裏口から長い中庭を通って行った。

時々、小沢氏の巧みなジョークでお嬢さんの笑い声が漏れてきた。

私は一応の役目を果たしたので斉藤家を辞去した。一時間半ほどが経つと小沢氏は日産の愛用車を運転、私の家の前でストップをかけた。

「これから銀座で夕食を摂ってきます」と言った。助手席にはお嬢さんが笑みを浮かべて腰掛けていた。

八時半頃、小沢氏はクルマを降りて「今日はどうも有りがとう。夕食を済し、お嬢さんを自宅まで送ってきたところで」といい、自宅に向かつてクルマを走らせた。

その後、小沢氏は数回、斉藤家に遊び、夕食に出かけたり、映画や画廊を見て回り、お互いに愛を確かめ合っていた。

頃合いをみて、私は小沢氏の胸の内を聞いてみた。彼は満面の笑みを浮かべ、躊躇なく、即座にOKのサインを出してくれた。

私は快よく受けて彼と堅い握手を交した。斉藤家では両親、彼女とも文句なしのOKだった。

私は格式の高い両家を考えて、仲介の責任の重みを感じ、華麗なセレモニーを空想、式場、招待客の面々、規模、アトラクションetcの夢を画き、心の準備を整えていた。

そんな楽しい夢のドラマを追っていた私に突如、晴天に霹靂の驚くべき超々ハブリングが激発したのだった。

中近東、アフリカ駐在の緊急社命が小沢氏に通告されたからである。

狼狽したのは私ばかりではない。

小沢本人は固よりのこと、小沢氏を中心とした親戚グループや小沢家、斉藤家ともに愕然として肩を落としたのである。

当時、中近東、アフリカ諸国は未開発の後進国が多く、また異教徒、異民族の野合諸国で一個のボタンの掛け違いで忽ち、火を噴くという一触即発の危険地帯だった。

しかし、それだけに背後に豊富な需要市場を持つ環境が控えていた。

当時、既に三菱、日野、豊田、マツダ、ダイハツなどが多数の社員を送り、各々市場を確保、拡大に互いに鎬を削り激動していた。

日産も早くから行動を起し、立派な業績を挙げていたが各社の激しい揺ぶりにこれまで以上の圧力をかけて日産の威力を示す必要があった。それにはバイタリティーに富む有能な若い社員を送り、競り勝つ必要があった。

その中の選考で既に中近東で活躍し、顕著な業績を残した実績があり、パワフルで実行力に富む小沢氏が最適とし、白羽の矢が立ったのである。

これは異例の抜擢で彼に取っては正に大典のチャンスだったのである。

小沢氏の運命の分かれ道である。

二者択一の苦しい立場に立たされたのである。小沢氏としては重大社命で責任は重い。社命にNOサインを出せば明日の運命を失うことになり兼ねないのだ。

小沢氏は二日間の猶予を得て熟考した。家族は固よりのこと、斉藤家やグループなどとも話し合った。

しかし、断を下すのは小沢本人である。

……終に小沢氏は……彼女を諦めて……結婚を断念、一切を白紙に戻すことになってしまった。

小沢氏としては苦渋の決断で、さぞ残念だったに違いない。

華麗なる二人の青春の夢のロマンスを破壊したのは一体、誰だったのだろうか。

それは姿、形の見えない幻の怪物だったのだ。

何という残忍で非業の結末であろうか。

最高の喜びと幸せは苛酷にも儚なく一瞬の間に文豪、漱石の屋敷の草露と消えたのである。我が商栄会のシンボル漱石の天性が聞えていたら事態は変わっていたかもしれない。これを境に私の情熱はブレークし、喪失してしまつた。斉藤文根氏も激しい衝撃を受けたらしく、これを転機とし、漱石、鷗外の二大文豪が書斎（居室）にした歴史ある全屋敷を日本医科大学に売却した。大学は輝く文豪達の歴史を背景に四階建てのビル二棟を建設、右一棟は地下一階付きで斉藤家の全部を同窓会館に充て、左一棟を日本医科大学の統轄本部とし、全学を監理、大本營的存在になっている。

「我猫庵」の跡地には石塔を建立したのは鎌倉漱石会と標示されている。

「我猫庵」それ自体は現在、愛知県大山市の明治村に当時の原型そのままの姿で組み立てられ国の重要文化財として保存されている。

斉藤家は文豪や一般文士その他財閥関係の著名人士や有産階級者達が聚落し、曾ては本郷の文化村と称された本郷西片町十番地（全戸が十番地）に新居を建築、居住してい

た。文根氏は数年前他界した。未亡人は老衰で現在、有料老人ホームで休養中である。

空家は現在、警備員を雇っているらしく、時々顔を見せている。

一人娘の長女は現時点では消息がなく、現況は不明である。

栄枯盛衰の移ろいは世の習わし、今となっては往時の斉藤一家は幻想の彼方に消え、旧文豪を背景とした格式は偲ぶ因もなく、転た、人間社会の無情と寂寥を覚えるのみである。

註

参考文献は鷗外図書館の蔵書一部を借用した。

町会活動の概要

平成十二年十一月から
平成十三年三月初旬まで

総務部

- 12年 11/5 向丘地区連合会（ゲーム・ミニ運動会） 誠之小学校
- 11/18 文京つづじ会 東天紅
- 12/12 定例役員会（慰労会） 常瑞寺
- 13年 1/11 文町連新年会 区民センター
- 1/22 文町連（町会長）新年会
- 2/5 向丘地区青少年対策委員新年会
- 2/9 向丘十二町会連合会新年会

婦人部

- 12年 11/11 文京つづじ会婦人部会
- 11/21 郵政事業協力会（事業見学） 寄居
- 12/1 歳末助合い募金 二二二、六〇〇円
- 御協力有り難う御座いました
- 12/4 日赤奉仕活動 くすの木郷
- 12/5 婦人部定例部会 後 懇親会
- 12/13 本郷清掃事業協力会
- 13年 年末年始ごみ収集について

交通部

- 12年 11/22 懇親部会
- 11/27 駒込交通安全協会理事会
- 13年 1/9 駒込交通安全協会新年会

防火防災部

- 12年 11/12 本郷消防署 防火コンクール
- 12/23 歳末夜警実施 二三日〜二九日まで
- 13年 1/13 「防犯部 防火防災部」協同部会（歳末夜警反省会）
- 1/14 本郷消防団始め式
- 2/13 災害時避難所運営訓練の打ち合わせ
- 3/11 災害時避難所運営訓練 駒本小学校

文化部

12年 蓬萊だより五十八号 発行・配布
 12/1
 13年

1/8 成人者に町会より記念品 九名
 2/12 おしるこ会 準備会
 2/25 おしるこ会 開催 於 真浄寺前
 3/18 新入学児童 お祝い 於 根津神社

十三年度 成人者名簿

荒田 悠土 向丘 二一十一一十一
 山根 大典 向丘 二一十七一十一
 須藤 彰宏 向丘 二一十八一十八
 山田 雄太 向丘 二一十八一十一
 関 隆司 向丘 二一十八一十六
 久員 友一 向丘 二一二十五一十
 宇名 良美 向丘 二一二十六一十二
 西田 倫子 向丘 二一二十七一二十五
 五十嵐 理恵 向丘 二一三十六一十二
 殿崎 悦子 向丘 二一十五一十六
 小川 葵 向丘 二一十七一十八
 小澤 美華 向丘 二一三十一一十八
 八木 望 向丘 二一三十五一十八
 中村 俊太 向丘 二一十七一十一

十三年度 新入学児童名簿

計報

当町会の方で平成十二年十一月十三日三月
 初旬にご逝去された方は左記の通りです。謹
 んで冥福をお祈りいたします。

関根 様 向丘 二一十五一十二
 信木 洋 様 向丘 二一十七一十二
 原山 様 向丘 二一二十七一二十六
 福島 光雄 様 向丘 二一五一十七
 内田 晃 様 向丘 二一三十一一五
 依田 恒彦 様 向丘 二一三十一一五
 清水 真 様 向丘 二一二十四一十二
 川口 東枝 様 向丘 二一二十三一十八

冬のイベント「おしる粉会」

実行委員 藍原紀久子

二月二十五日、日曜日。朝から晴天に恵ま
 れましたが、北風の強く吹く中、町内会の
 「おしる粉会」が賑やかに行われました。
 朝から役員や婦人部の方々により会場造りや
 その他準備も手際よく着々と進みました。
 ガスコンロの火が風で消されそうになり少々
 手間取りましたが開始時間前にはお餅も焼け
 始め準備完了。

町内の方達も少し早く来られた方も居り
 段々と人数が増えるにつれて毎回好評な焼き
 そばは、何度もお代わりになる元気な子供達
 もいて大忙しでした。用意された座席では、
 小さなお子さんを連れられたお母さん、ご年配の
 方々や若い人達もまじり皆さん楽しんでお
 話しをしながら温かいおしる粉や焼きそばを

食べておられました。寒風の吹く寒い一日で
 したが町内の多数の方々にご参加を頂き行事
 の実行委員も共に楽しみながら賑やかに楽し
 い一時を過ごす事が出来ました。
 次回は又、もっと大勢の方々にご参加を頂
 き町内の親睦の場となれば良いと思います。



蓬萊句壇

腰痛の長引き候寝正月
 数の子や「巳・寅・申」 忌む人の居て

青木 沖寿

あれこれと計画だけの寝正月
 スーパーの目抜きに若葉席をとり

岡田 栄子

仙人の落ちる夢見つ寝正月
 この旗の汚れを憶ふ初国旗

小野 向雪

一系の男子生まれず年男
 都鳥「少年工」は死語となり

金子 卿雨

今昔の感ひとしおや初国旗
年男一日につぼん男子たり

津久井としを

骨休み己に許し寝正月
初枕夢路長くして忘れけり

彦坂つぐを

まず父の役たりしこと初国旗
かつて母に恋の歌留多のありし日々

平山 雅美

風花や袖の袖に戯れり
古き櫛旧き衣装の年男

福山 七重

喪の家を訪ふ人も無く寝正月
冬晴れや遺骨に被すゴルフ帽

船橋 小糸

年男立ちて厨の手狭かな
初国旗鼻緒のきつき柵の下駄

森 ゆかり

吊るし雛男雛女雛を廻らせて
かの子忌や太陽の塔ははるかなり

城山 吹雪

変わる世に変わらぬ我が家寝正月
今更に立志でもなし初日記

池田 連木

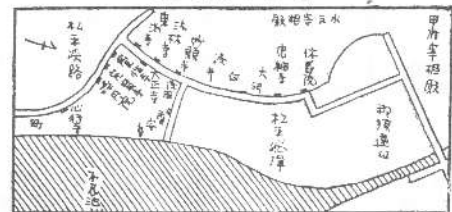
「江戸古地図より」

先ごろ、旧友から貰った古書のなかに「根津神社」の社地となった甲府宰相、徳川綱重の下屋敷の見える地図(第一図右側)があった。それに拠ると藍染川が不忍の池に流れ込む七軒町

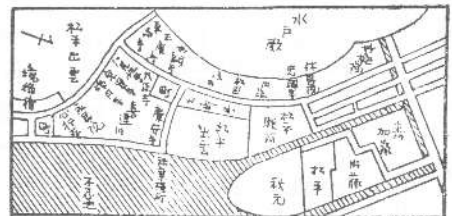
辺りの変遷が、徳川初期・末期
そして昭和の初期の三つの絵図
で示されている。

第一図の右の道路は現在の「言問通り」で、第二図と重ねて見ると今の「不忍通り」と「言問通り」が交差する赤札堂根津マート」から南が既に「不忍の池」であったらしい。徳川末期になると、現在の「弥生会館」近く迄、池が狭まって、大名・旗本の屋敷地になっている。

【附近町軒七】



(1) 徳川初期(寛文)



(2) 徳川末期(安永)



(3) 昭和初期

さらに昭和の初めには、埋め立て
が広がって、ご存知の方もある様に「市内電車」の軌道が通っている。

現在も残っている「忍岡小学校」と隣接している日蓮宗「大正寺」は慶長九年(一六一四)に創設されたと言う。其の後、元和(一六一六)になって宗賢寺、寛永(一六二四)に覚性寺と多くの寺院が建ち並ぶことになった。この事は、この辺りが宅地として適地になったことを示している。

第二図の中央少し上に鳥居印のある神社は、現在根津神社の預かり社になっている「七倉稲荷」で根津様の祭礼には神輿の巡行コースにも入っている。第二図と第三図の左端に名に見える「境稲荷神社」(現、大本教東京本部裏手)も根津さまの預かり社である。この社の歴史は古く、文明(一四六九)年間に足利義尚が建

立したと伝えられている。名の謂われは、「忍が岡」と「向が岡」(東大の台地)との境に建てたので「境稲荷」としたという。この社域には、俗に「弁慶鏡の井」と言う名水が今も本郷台地の地下水脈から湧き出ている。

(池田 暉 記)

編集後記

寒く不順な冬でしたがようやく春が来ました。政治も経済もまだまだ不安定ですが何と云っても健康が一番です。身も心も明るく力強く前向きに生きたいものです。

編集委員

三宅栄三 竹中俊之 常岡 裕
青木喜一 池田 暉